

嵐牛 友の会便り

第十四号

2018.5.30発行

〒436-0004

掛川市八坂434-1

嵐牛俳諧資料館

伊藤鋼一郎

携帯番号

090-1472-2972

Eメールアドレス

takumise@

titan.ocn.ne.jp

目次

- [1]古希(七十歳)は知らないうちに通過しました
伊藤鋼一郎
- [2]『柿園嵐牛俳諧資料集』の刊行
—謝辞と課題—
加藤定彦
- [3]増田嘉伸氏ご所蔵の
栗田土満宛本居宣長
書簡について
高松亮太
- [4]『柿園嵐牛俳諧
資料集』ご案内
- [5]講読・鑑賞の会
今後の予定
- [6]嵐牛俳諧資料館近影

古希(七十歳)は知らないうちに通過しました

伊藤鋼一郎

還暦はもちろん、古希(七十歳)もとうに過ぎ、此のところ自分の一生について、ふと夜中に目が覚めた時考えるようになっていきます。頭をよぎるのは次に列記することで、なんと忙しい人生だったと！ 少しヘタレ気味！

○ 家業の建築設計事務所の経営

○ さいたま市、渋谷区に所有する賃貸マンションの経営

○ 東京在住時から続けている下手なゴルフ

○ 中学〜大学〜現在まで続けている楽器(フルート)の演奏

○ 帰郷後から始めた祭り囃子の会での笛吹きとしての活動

○ 帰郷後から始めた百五十坪くらいの家庭菜園

○ 帰郷後から始めた住宅と約九百坪の敷地の管理

○ 帰郷後から始めた隣保の区長、班長、神社、寺の総代等

○ 小学五年生頃からの車いじり、改造、ドライブ(キャンピングカー)

○ 嵐牛遺産の整理

人間は自分の生き方を持っているようですが、私は『くよくよしても始まらない、昨日以前のことは忘れて、今日出来ることは今日の内に済ませよう』です。

長年挑戦し続けていて一番納得できないのがゴルフでしたが、自分は左利きであり右手が弱いのに最近になって気がつき、意識して右手で打つようにしたら納得できるゴルフがようやく出来るようになりました。妻は元より今まで色々の場面で接していただいた皆様に、感謝！感謝！感謝！です。

友の会は今まで年間五回開催してきました。最大の目的は、今回完成した

『柿園嵐牛俳諧資料集』の刊行準備のための情報収集と、多くの方に嵐牛を知っていただくためでした。これからも友の会の活動は続けますが、年五回は準備などきついものがありました。申し訳ありませんが、年二回(五月、十一月)の開催とさせていただきます。これからの友の会では、資料として『柿園嵐牛俳諧資料集』を御持参ください。

この度の念願の『柿園嵐牛俳諧資料集』は加藤・倉島両先生の研究者仲間の方、主たる図書館、嵐牛友の会、私の友人、親戚等に贈呈させていただきました。贈呈させていただいた方から御礼状を沢山いただき、その中で、特に加藤先生は俳諧研究の中心的存在で、研究者の皆が尊敬している方だったことを知りました。私は本当に先生に出会い幸運で幸せ者であったと痛感している次第です。沢山いただいた礼状の中から一通披露させていただきます。

拝啓 若葉の鮮やかな季節となりました。益々御盛栄のことと拝察申し上げます。

さて本日は『柿園嵐牛俳諧資料集』お届けいただき有難うございました。およそかような資料はご子孫の先祖に対する敬愛の念が無ければ残るものではなく、それらを本として纏める事も至難のことからで、出版を発起なされたことに敬意を表する次第です。編集者として加藤定彦氏に巡り合わせたことも僥倖でした。かような資料集は翻刻だけで済まず例が多く、作品集に注を添え、月並の興行圖まで押さえるという誠実・丹念な仕事ぶり、加藤兄ならではの拝読した次第です。ご先祖の業績が確かな形で残されたことを心からお喜び申し上げます。取り急ぎ御礼まで。

四月二十三日

奈良大学名誉教授 永井一彰

敬具

(嵐牛友の会・会長)

『柿園嵐牛俳諧資料集』刊行——謝辞と課題——

加藤 定彦

四月十四日(土)、磐田市中心図書館で催された「遠州の俳諧」展と寺田良毅氏の講演会に出掛けた。ともに有益で、「嵐牛友の会」の会長伊藤さん御夫妻ほかの面々とも顔を合わせ、多彩な展示に眼福を得ながら談笑の内に半日を過ごした。帰宅すると、印刷所から予告通り『柿園嵐牛俳諧資料集』の宅配便が届いており、荷を開いて確認した。手土産に頂いた山独活をさっそく賞味、

山独活と本を肴に酒うまし 釣虚

といささかの感慨を駄句に吐露、メールで送って会長御夫妻や共編者の倉島君と喜びを共有した次第である。

* 伊藤家、嵐牛俳諧資料館にお邪魔する内、嵐牛資料がかなりの確率で遺存していることが判り、資料集編纂の衝動を強く感じはじめたのだが、正直にいつて伊藤家の蔵本だけでは十全なものが出来ると思えなかった。かつて遠州各地の俳諧資料を渉猟した塚本五郎氏の著作に取り上げられた俳書には、伊藤家にはない嵐牛関係書が少なくない。その多くは、嵐牛門下四天王の子孫が襲蔵の資料らしく、是非ともそれらの資料も拝見・撮影し、底本として使わせて頂かなければならないと感じたからである。その実現にはそれなりの月日を要したけれども、伊藤会長のご尽力とご子孫の方々などのご協力も頂いてスムーズに調査・撮影が進展し、構想以上の密度で編纂することが出来た。改めて厚く御礼申し上げます。

* 嵐牛研究には、雪門を中心とする駿遠の俳環境の精査は欠かせない。とくに月並句合は諸派が入り乱れて活況を呈し、俳壇への影響も甚大だった。嵐牛が遠州俳壇に雄飛したのも月並や寺社奉納の柿園評句合によっている。しかし、現況では駿遠の雪門資料が揃って存在している訳ではないし、月並句合の資料も成績結果が丁摺の形で発行されるため、残っているもの多くは揃っていない。今後も発掘・調査の継続が必要である。

* 日記は二年三ヶ月分のみで、俳歴の五パーセントほどでしかない。解説に

はすこぶる難渋した。しかし、俳諧宗匠の生活ぶりが窺え、「安政の大獄」や「ええじゃないか」「天皇御東行」など、激動期の世相を窺う貴重な歴史資料となっている。その分野での活用も期待したい。

* 手紙の解説にも難渋した。月並句合の丁摺発行が彫師の病氣などで大幅に遅滞、困惑した手紙が多く、貨幣価値の変動で、丁摺余白に応募料の支払いを指定した口上とともに、混乱した時代の空気が見て取れ、興味深い。

* 伊藤家に一枚摺の遺存は意外に少ない。門人や月並句合の勝者に景品としてプレゼントしてしまったのであろうか。幸い故田中明氏のコレクションや晴笠のご子孫大竹裕一家に多くが遺存していて、主なものを収録することが出来た。深謝申し上げます。ただし、表紙カバーに掲載したものを除き、モノクロなのが少し残念ではあった。

* 嵐牛の発句集は没後に門人らにより刊行された『嵐牛発句集』のみを収録した。伊藤家には自筆の発句集が一冊本と四冊本の二種、門人が自筆発句集をもとに編纂した発句集草稿二編(各四冊)がある。比較すると、没後刊行した『嵐牛発句集』の発句、付録する文集の校訂は必ずしも厳密でなく、嵐牛の意図した本文と異なる箇所が見える。

嵐牛の句や俳文に目を通し、難解な語句に注を付けてみて痛感したのは、和漢の学識の広さである。師弟で学識・センスに歴然とした格差があるのを知り、果たして門人たちが本当に遺稿から佳句を精選し得ているかどうか、不安を感じてしまった。

従って、今後の課題は全句集の編纂だが、それと同時にどんな句がほかの俳人の撰集に採られているか、また嵐牛自身がどんな句を自信作として寄せているか、検証する必要がある——連句作品の読み込みもまた重要課題として控えているが、それは後生を待ちたい——。

* 私どもは研究者・専門家以外の方にも親しんで頂けるよう、全編に略注を施した。世代・地域・分野の違いや浅学のため、見当違いの失考が少なからずあることを恐れる。お気づきの点があれば、是非ご批正を賜りたい。

また、お読み頂いたことの証左として感想はもちろん、お手元の辞書で解決出来ない疑問点・質問などがあれば遠慮なくお寄せ頂きたい。解答可能な限りお答えしたいと思います。(嵐牛友の会・顧問)

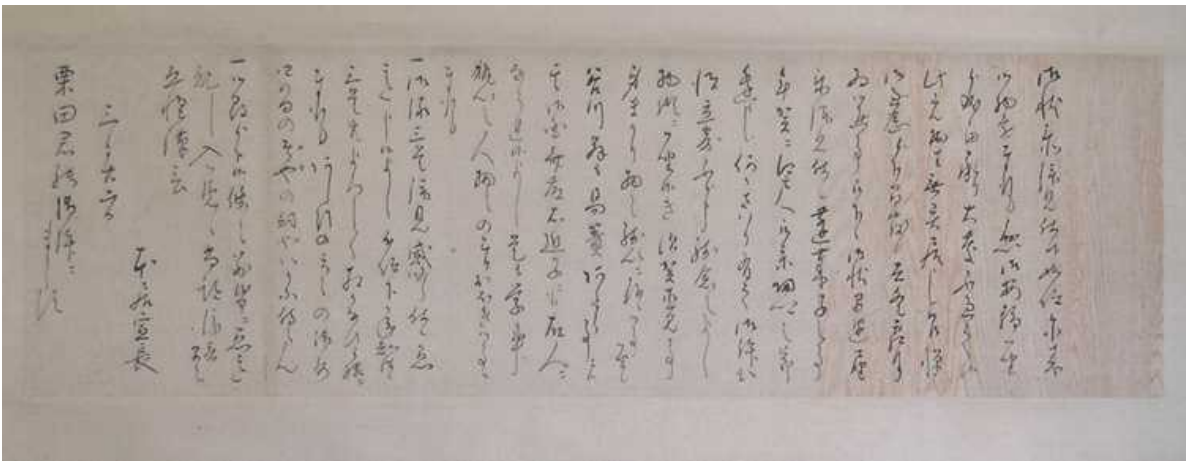
増田嘉伸氏ご所蔵の栗田土満宛本居宣長書簡について

高松 亮太

本誌十二号で増田嘉伸氏が私蔵されている石川依平の詠草二枚を紹介したが、ここでは同じく増田氏ご所蔵の栗田土満宛の本居宣長書簡を紹介することとする。まずは影印とともに全文の翻印を掲載しておく。翻印に当たっては、通行の字体に統一し、濁点・句読点等を私に附した。

御状忝拜見仕候。如仰爾来御物遠奉存候。愈御安静御坐被成候由承り、大慶不過之候。此元拙生無異居申候。乍憚御慮念被下間敷候。去冬霜月為御返事被下候御状早速届、忝拜見仕候。蓬萊子之事年賀二江戸へ被参、帰郷之節逢申候。何かさはり有之、御許へも得立寄不被申残念之よし、物語二御坐候き。須賀直見事身まかり、扱々残心二存候御事御坐候。谷川翁も易簀、あだし事二ハ其御国斎藤右近子二も故人二なられ候よし、是も学事執心之人、扱々のこりおほき御事二奉存候。

一、御詠三首拜見感吟仕候。愚意申候よし被仰下、承知仕



候。三首共よろしく相かなひ候様二奉存候。あし引の云々の御哥、四の句のぞやの詞いかに侍らん。

一、御尋被下候條々、別紙二愚意記し入御覽候。尚期後音、早々恐惶謹言。

三月廿二日

栗田君の御許二まうす

本居宣長

本書簡に關しては、天理大学附属天理図書館に蔵される「栗田土満雑集」のなかに、土満自身による写し（寛政八年九月七日写）が存在し、既にその写しをもとにした翻印が筑摩書房版『本居宣長全集』第十七巻などに備わる。内容は既に周知のものとはいえ、これまで知られていなかった宣長の遺墨が出現し、鑑賞する機会に恵まれたことを大いに喜びたい。以下、同書の解説を参考にしながら、簡単に解説を行っておく。

まず本書簡の年代だが、記事中に須賀直見、谷川士清、斎藤信幸（右近）死去のことが記されていることから、三人が没した翌安永六年（一七七七）のもので間違いない。伊勢松阪の宣長門人須賀直見は安永五年十月八日没、同じく伊勢国津の和学者谷川士清は同年十月十日没、遠江見附の真淵門人斎藤信幸は同年十一月十三日の没である。門人・知人の相次ぐ死を「あだし事」と嘆じ、「残心」「のこりおほき」と哀惜の念を表している。「蓬萊子之事年賀二江戸へ被参」は、『全集』解説によれば、荒木田尚賢が正月六日の神官僧侶拜賀のために江戸へ下向したことを指すという。

また、一つ書では、土満詠草三首に添削を加えたこと、土満の質問に回答したことを伝えている。宣長は同年代の土満の歌には感心することが多かったようで、本書簡の「三首共よろしく相かなひ候」のように、土満宛書簡には彼の歌に対する褒辞が散見する。

なお、自筆書簡には、土満の写しにあった次の一条が欠落している。

一、直見御とぶらいの御歌も被遺申候とて、稻掛茂穂見セ申候。御深情之段言表二あふれ、今更悲情ヲ催申候。

これは、軸装に際し、署名・日付・宛名が記された末尾を省くわけにはいかないため、その前にある適当な一条を省いたものであろう。

（「嵐牛・友の会」幹事補佐）

*手紙の内容については、次回友の会で解説します。

『柿園嵐牛俳諧資料集』ご案内

購入希望の方は、嵐牛友の会会長
伊藤鋼一郎までご連絡ください。
頒布価格は一部五〇〇〇円です。



講読・鑑賞の会 今後の予定

第十七回 六月十七日(日)

会場 嵐牛俳諧資料館和室 八畳十六畳
時間 午後一時三十分～四時三十分
内容 加藤定彦先生『柿園嵐牛俳諧資料集』あれこれ
高松亮太氏「栗田土満宛本居宣長書簡について」
石川依平「宇津の山越」講読
「嵐牛発句集」講読 ほか

第十八回 十一月十八日(日)

会場 嵐牛俳諧資料館和室 八畳十六畳
時間 午後一時三十分～四時三十分
内容 石川依平「宇津の山越」講読
「嵐牛発句集」講読 ほか

※ 友の会に対するご要望などをお聞かせください
また、友の会会員の方、その他嵐牛繋がりで面白いこと
がありましたらご投稿ください。



咲き繋ぐ皐月

五月晴れ 復活の皐月は桃色から朱色へ間断なく咲いています

平成三〇年五月二五日 撮影 事務局 伊藤英子